

月性『清狂遺稿』考

——中島棕隠に贈った詩を例として——

愛 甲 弘 志

一、はじめに

長藩は周防の人、月性（一八一七―一八五八）は、浄土真宗本願寺派妙円寺（現山口県柳井市遠崎七二九）の僧侶である。彼は動乱の幕末にあつて、浦鞆負（一七九五―一八七〇）・村田清風（一七八三―一八五五）・吉田松陰（一八三〇―一八五九）ら多くの人士と交わり、西本願寺広如宗主（一七九八―一八七二）に「海防意見封事」を奉った海防僧として知られている。しかし未だなお武士が優位であつた当時の社会の中で、地方の一介の僧がしっかりとその足場を固めて大きな影響力を持ち得たのには、気魄に満ちたその精神力はもとより、彼の漢詩創作を抜きに考えられないであろう。なぜなら漢詩ゆえの強い伝播力を持ち、また必ずしも読者を選ばないという利点も活かして、「鉄扇の歌 松齋村田翁に呈す（鐵扇歌 呈松齋村田翁）」（嘉永七年 一八五四 月性38歳）など、説得力のある議論の詩を高らかに吟じてみせたところに、幕末に於ける月性という人物がより強烈に印象づけられているからである。よつて漢詩人としての月性を解明することは、幕末に於ける彼の真の存在意義を明らかにする上でひ

じょうに有効であるといえる。しかし政治的、思想的、或いは宗教的側面からのアプローチに比して、月性の漢詩についての研究はいまだ手つかずの処が多すぎるのが実情である。筆者は漢詩人としての月性を解明するためのその手始めとして、月性の漢詩を収める写本や刊本といった資料の収集や校合を行ってきたが、本稿ではその過程の中で気づいた、月性の漢詩を読み解く上で注意すべきこと、特に通行本とされる『清狂遺稿』の扱いについて些か私見を述べてみたい。

二、月性漢詩の原資料について

そもそも月性に対する筆者の興味は、地方の一介の僧が動乱の幕末にあつて八面六臂の活躍をするまでになる、その成長過程にある。わずか十五歳の若者が意を決して九州に遊学し、ありとあらゆる学問を貪欲に吸収していたことがその時代に有用な人物と目されるようになったのであるが、彼が創作した漢詩を彼自身の履歴と幕末という時間軸の中で並べて見ることによって、漢詩人はもとより、人間月性の成長の過程を十分に窺い知ることができる。幸いなことに月性の漢詩に関して、その成長の跡を辿り得るだけの原資料というべきものかなり残されている。いまここに月性漢詩のまとまった写本を掲げてみるに、山口県柳井市の月性展示館（山口県柳井市遠崎七二九）には以下のような写本が蔵されている。

①表題『虎山醒窓二家批評未定清狂吟稿』卷之三

①a『未定清狂吟稿』卷之三

①b『未定小稿』

②表題『天保古詩百一鈔草稿』

② a 『天保古詩百一鈔草稿』

② b 『草稿』

② c 『鄙稿』(其一)

② d 『鄙稿』(其二)

② e 『庚戌未定稿』

② f 『鄙稿』(其三)

② g 『鄙稿』(其四)

また山口県萩市の松陰神社宝物殿至誠館(山口県萩市椿東一五三七)には以下のような写本が所蔵されている。

これは昭和八年(一九三三)夏、『松陰全集』編纂の過程で、萩市の吉田松陰の実家である杉家の書棚から偶然に見つかったものという。¹⁾

③ 表題 『清狂吟稿』(第一冊)

③ a 『清狂吟稿』卷之一

③ b 『清狂吟稿』卷之二

③ c 『庚戌辛亥未定草稿』

④ 表題 『清狂吟稿』(第二冊)

④ a 『壬子至甲寅稿』(仮称)

④ b 『草稿』

またこれまでその存在が知られることはなかったが、大分県中津市の耶馬溪風物館(大分県中津市本耶馬溪町曾

本二一九三一一）で次のような写本が確認された。

⑤ 『清狂吟稿』 卷之三

⑥ 『清狂道人遺稿』

以上の写本が月性の漢詩のまとまったものであるが、その他、山口県文書館・山口県立山口博物館・長府博物館などにも漢詩数首が所蔵されている。月性の漢詩をすべて合わせると四百首を超えるが、これら現存する月性の漢詩資料の詳細については、後日、稿を改めて述べることにしたい。

三、『清狂遺稿』について

月性の漢詩を収める写本としてまとまったものは、管見の及ぶ限りでは前節で掲げた六種であるが、そもそも写本は唯一無二の原資料であることから、一般の読者が月性の漢詩を繙いて見るにはかなり不便なものがある。そこで月性の漢詩を閲覧するのに最も簡便なものとして、『清狂遺稿』上下巻全二冊（図①）が挙げられる。こ

の書の刊記は次の通りである。

明治二十五年一月五日印刷 明治二十五年一月出版

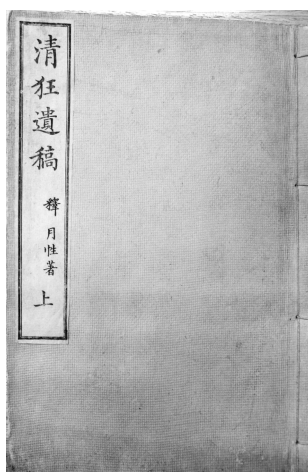
著者相續人 山口縣周防國玖珂郡鳴門村五百廿五番地 桂

龍暁

編輯者 山口縣周防國大島郡久我村八百七十二番地 大洲

鐵然

編輯者 廣島縣備後國沼隈郡山南村 天地哲雄



図①『清狂遺稿』 卷上表紙



図②『清狂遺稿』題簽及び見返しの版本

發行兼印刷者 京都市下京區寺町通四条上ル十八番地 田中治兵衛

この書は、月性が自坊妙円寺に設けた私塾時習館の門人であつた大洲鐵然（一八三四—一九〇二）と天地哲雄（？—？）によつて明治二十五年（一八九二）に編纂出版されたものである。^③これが月性が没した安政五年（一八五八）から三十四年後に日の目を見たとはいえ、連作詩を一首として数えても、全部で二百六十四首というかなり多くの詩を収録している。しかも九州は豊前の恒遠醒窓の蔵春園の門をくぐつて三年目の天保四年（一八三三—

歲）の「懷いを秋晚香に寄す四首（寄懷秋晚香四首）」から月性が亡くなる前年の安政四年（一八五七—四歲）の「南紀自り京に還り、……（自南紀還京、賦奉寄執政久野丹州、及司農水野氏、并小浦白井茂田諸君）」詩まで、月性の漢詩創作の生涯のかなりを網羅し、且つ可能な限り制作時代順に並べようとする意図がある。現在では国会図書館などで画像がインターネットでも公開されているが、この書の出版によつて月性漢詩の散逸が防がれたことは甚だ重要な意義を有する。近年の月性に関する本格的な研究書、例えば、三坂圭治氏監修の『維新の先覚「月性」の研究」^④や海原徹氏の『月性」^⑤などは、筆者も多くの教示を得ているが、これらのすぐれた業績を世に問わしめたのも、やはりこの『清狂遺稿』の存在を抜きには考えられない。ここで敢えて附言するならば、昭和四十三年（一九六八）五月に発足した僧月性顕彰会がこの二書の上梓に大きく寄与していることである。そして昭和四十五年（一九七〇）、妙円寺の横に建てられた月性展示館にこの『清狂遺稿』の版本（図②）など貴重な資料が収蔵され、月

性が未来に亘って語られ続けることを可能にしているのも、この顕彰会の大きな功績である。さらにこの文化遺産の継承という点で言えば、吉田祥朔氏（一八七七一—一九六七）が昭和初期に各地に散在する月性関係の資料を博搜した労作「月性師事蹟資料」（山口県文書館吉田樟堂文庫所蔵）から私たち後進の者たちは多大な恩恵を蒙っている。

四、『清狂遺稿』所収の中島棕隠に贈った詩について

このようにその収録数の多さ、そして概ね制作年代順に並べられていることから、『清狂遺稿』が、月性漢詩集の通行本として多くの読者や研究者の閲覧の便に供せられるべきものであることは疑いを容れない。しかしこの書が月性没後三十四年経ってから出版されたものであることを思えば、編者である大洲鐵然らは前掲の抄本などを参考にしながら編纂せねばならなかったところから生ずる様々な苦勞と困難があつたことは容易に想像できる。そしてこのような困難が当時の月性を見えにくくさせているように見える。そこでこの『清狂遺稿』に収める詩の中で、中島棕隠（号棕隠軒 一七七九—一八五五）に月性が贈ったという詩を例として、その当時の月性の足取りについて分析を加え、併せて当時の月性を見えにくくさせている原因について私見を述べてみたい。その詩は以下の通り。

洗心亭席上賦贈中嶋櫻隱軒 洗心亭の席上にて賦して中嶋棕隠軒に贈る

1 筑紫河山遊履還 筑紫河山 遊履還る

2 豈圖此地暫留連 豈に図らん 此の地暫し留連するを

3 鶯花三月瓊江酒 鶯花三月 瓊江の酒

4 風雨一宵壇浦船 風雨一宵 壇浦の船

5 吟杖探來多勝概 吟杖探^{なす}ね來たれば勝概多し

6 奚囊括去盡佳篇 奚囊^{けいのうく}括^ゆり去^{ことごと}けば尽く佳篇

7 不知今夕又何夕 知らず 今夕^ま又た何の夕なるかを

8 幸得追陪翰墨筵 幸いに翰墨の筵に追陪するを得たり

この詩の内容については後で詳しく述べることとして、『清狂遺稿』が概ね制作年代順に並べられていることを前提にすると、その巻上の十五番目に並べられているこの詩は月性の詩作としてはまだ初期の頃のものであるということになる。この詩に関連して、『維新の先覚―月性の研究』の冒頭に附せられた立泉昭雄氏の「贈正四位月性上人年譜」には次のように記している。⁽⁶⁾（傍点は筆者による）。

一八三五 天保六（乙未） 一九

上京、途中にて詩を作る

冬醒窓塾より帰郷

一八三六 天保七（丙申） 二〇

京都で新年を迎う

三月、洗心亭席上で中島棕隠軒に詩を賦して贈る

三月二十六日、広島に遊び初めて坂井虎山に謁して詩を賦す

秋、広島を経て九州にゆき佐賀市与賀町善定寺不及の門に入る

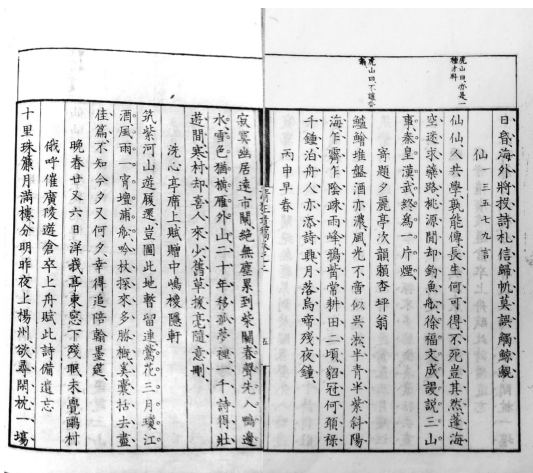
また海原徹氏の『月性』「月性略年譜」は次のように記す。⁽⁷⁾

(天保) 六 一八三五 19

上洛、短期間で帰る。冬、蔵春園を去り帰郷。年末、上洛する。

(天保) 七 一八三六 20

新春を京都で迎える。3月中島棕隠に詩を示す。3・26広島島の坂井虎山に束脩を呈する。秋、佐賀遊学のため発つ。11・24日田成宜園に入り客席生となる。七日間学ぶ。12月初旬、薬師寺村の蔵春園を訪ね、しばらく在塾。12・22蔵春園に別れを告げて発つ。年末、佐賀善定寺の精居寮に入る。



図③『清狂遺稿』巻上第五葉

これらの年譜に拠ると、この詩は天保七年（一八三六）三月、京都の洗心亭なるところで中島棕隠に贈った詩ということになる。⁽⁸⁾ 中島棕隠といえ、当時の京都を代表する漢詩人である。

この詩が二つの年譜に記すようなものであるとすれば、二十歳になったばかりの月性はどのようなツテでこの大御所に会うことができたのだろうか。またそもそも月性はどのような目的で京都へ行ったのであろうか。

『清狂遺稿』に収める詩の中には、文字の異同は当然あるものの第二節掲出の①から⑥までの写本所収の詩と重複するものが見える。しかしこの詩は現在のところ『清狂遺稿』のみで見えるもので、ここからも『清狂遺稿』の編者が拠った写本がどこか他にもあることが知られる。『清狂遺稿』（図③）では、

この詩の前に「丙申早春」詩があり、そしてこの詩の後に「晩春廿又六日、洋莪亭の東窓の下に残眠未だ覚めざるも、鷗村（秋元鷗村）俄かに呼びて広陵（広島）の遊を催せば、倉卒に舟に上る。此の詩を賦して遺忘に備う（晩春廿又六日、洋莪亭東窓下残眠未覺、鷗村俄呼催廣陵遊、倉卒上舟。賦此詩備遺忘）」詩があることから、これら二つの詩に挟まれる中島棕隠に贈った詩が、時間的に天保七年（丙申 一八三六）の早春一月から晩春三月二十六日までの作と見るのは、一応、理に適った判断ではあろう。さらに上掲二つの年譜は、詩中第三句の「鶯花三月」というのに拠って三月作と見なしたのであろうか。

しかしこの頃の中島棕隠の足取りを辿ると意外な事実突き当たる。入谷仙介氏は、その著『中島棕隠』で以下のように記している。⁽⁹⁾（頁数と傍点は筆者による）

天保六年の新春に帰洛した棕隠は、初冬一〇月には長崎に向けて出発する（第一三六頁）……天保七年三月、一日（一八三六年五月一日）に、帰洛するといつて長崎の友人、村尾万載に留別、旅立つ人が見送りの人に与える詩を贈っている。しかしまだ数日を過ぎたようである。東へと棕隠は向かっていくが、歩みは遅々としている。四月一日（五月二五日）には太宰府にいた。（第一四二頁）しばらく滞在、博多に往来して、博多に移ったのは五月初めであるらしい。五月二五日（七月八日）に博多を出発、六月一日（七月四日）に往路に通った赤間関についた。ここでは広江大車の梅月楼に宿する。……その月の二三日、雨を冒して長府に出発、玉函楼に宿泊した。七月二日（八月三日）に赤間関から広江大車らがやってきて、長府の詩友とともに詩会を開いた。その後間もなく長府を出発したようである。……小郡から岩国で錦帯橋を見物、宮島に参拝、広島、音戸の瀬戸から竹原をへて九年ぶりの輓に着く。……帰洛は翌天保八年の春になるが……（第一四二）

つまり天保七年（丙申 一八三六）三月十五日から、中島棕隠は九州は長崎に滞在しており、この時に月性が京都で棕隠に出会うというのはあり得ないのである。入谷仙介氏はこの頃の棕隠の足取りを『金帚集』（天保十年刊）に拠っているが、ここに改めてその巻五に収められる天保七年三月以降の長崎から京都への帰途に詠まれた詩について、具体的に時間や地名が記される詩題や詩句を広島まで抜き出してみる。（訓読は原文に附せられた訓点に拠って補足。傍点及び※は筆者による）

① 「三月十五日、將に京師に還らんとして村尾萬載に留別す（三月十五日、將還京師、留別村尾萬載）」（第二十二葉表）

② 「四月十一日、太宰府觀光。舍の小集にて分ちて韻支を得たり。且つ其の五字を勒す（四月十一日、太宰府觀光。舍小集分得韻支且勒其五字）」（第二十三葉表）

③ 「四月廿七日、博多に遊び松永子登を訪ね、和答の詩を示さる。再び賦して之を謝す。猶お前韻を用う（四月廿七日、遊博多訪松永子登、見示和答詩。再賦謝之。猶用前韻）」（第二十五葉表）

④ 「（※五月）廿五日、博多を發し赤間駅（※下関）に宿す……（廿五日、發博多宿赤間驛……）」（第二十七葉裏）

⑤ 「六月朔、再び赤間関を過ぎ広江大車の榎月楼に宿す。寓感の二絶を示す（六月朔、再過赤間関、宿廣江大車榎月樓。示寓感之二絶）」（第二十八葉裏）

⑥ 「六月廿三日、雨を衝きて赤間関を發す。広江大車・香取小谷共に送りて長府に到る。途中賦して謝す（六月廿三日、衝雨發赤間関。廣江大車・香取小谷同送到長府。途中賦謝）」（第三十葉表）

⑦ 「七月二日、中川子精・武藤子和……香取小谷輩再び余の寓する所の玉函楼（※長府）に会す……（七月二日、中川子精・武藤子和……香取小谷輩再會于余所寓玉函樓……）」（第三十二葉表）

⑧ 「小郡駅を過ぐ（過小郡驛）」（第三十三葉裏）

⑨ 「巖国錦帶橋（巖國錦帶橋）」（第三十三葉裏）

⑩ 「新湊（※岩国）を發し宮島に到る。舟中懷を巖国の境子平に寄す（發新湊到宮島。舟中寄懷巖國境子平）」（第三十四葉表）

⑪ 「嚴島神廟四首（嚴島神廟四首）」（第三十四葉表）

⑫ 「再び新湊を過ぎ……」（再過新湊……）」（第三十四葉表）

⑬ 「柳井津高田氏の洗心亭（柳井津高田氏洗心亭）」（第三十五葉裏）

稻香籬落曲 稻は香し 籬落の曲

野水寂無聲 野水寂として声無し

客少魚安性 客少くして魚性を安んじ

居幽木向榮 居幽にして木榮に向かう

自非肥遯久 肥遯の久しきに非ざる自りは

焉得靜觀清 焉んぞ得ん靜觀の清きを

偶借良宵榻 偶ま借る良宵の榻

秋蟾坐有情 秋蟾坐ろに情有り

⑭ 「平尾村（※山口県熊毛郡平生町）藤井氏の宅の小集。分ちて韻寒を得たり（平尾村藤井氏宅小集。分得韻寒）」

（第三十六葉表）

……

主人好意供珍饌 主人好意もて珍饌を供す

魚蠶鼈裙紛満盤 魚蠶鼈裙紛として盤に満つ

此の日竈關（※上関）小泉玄常来りて会す……（此日電關小泉玄常來會……）

⑮「広島のお客様にて宮崎木雞に贈る（廣島、客舎贈宮崎木雞）」（第三十六葉裏）

これらの詩題から見ても、長崎から各地で詩会を重ねながら、ゆつくりと帰京していった棕隠の足取りが概ね確かめられる。例えば④は五月二十五日、棕隠が九州博多を離れて山口の赤間関（下関）に至り、⑥は六月二十三日に赤間関を離れて長府（山口県長府市）に赴いたことなど。そしてこの中で最も注目すべきは⑬の詩である。それは棕隠が柳井津（山口県柳井市柳井津）の高田氏の洗心亭に立ち寄ったことを示しているからである。この洗心亭の主である高田氏について、『現代防長人物史 地』（大正八年 井関九郎 発展社）第二一六頁に「高田傳兵衛」なる人物を掲げ、彼が江戸時代から続く柳井の有名な醤油の醸造家であることを記している。また福本幸夫『柳井の町並み点描 柳井の江戸文化』（昭和六十二年十二月五日 周南新報社）には次のような記載がある。

「自然を愛す（一）——柳井十二景——」（第三〇頁）

享保年間（一七一六～三五）柳井の十二景をよんだといわれる次の十二首の短冊が土手町の高田家に残る（作者名もあるが省略）。……

「自然を愛す（二）——柳井十二景——」（第三二頁）

この「柳井十二景」は歴代の高田家自慢の短冊だったようだ。五代伝兵衛（嶺松亭素琴とも）の代に、美濃五世大宗匠隴庵再和坊（天明六・一七八六没）が当家を訪れたときに見せているが、ここでは六代伝兵衛（洗心亭歌峯とも）を訪れた美濃十世大宗匠五竹庵子琴の残したものを紹介しよう。

洗心亭をおとづるに、まずとて別業に誘はるる。此亭や十二の詠ありてある人額に物して送られるを一間に掛けたり。……

今日伝来する十二枚の短冊は、一冊の帖に貼りつけて高田家に保存されているが、おそらく、六代目伝兵衛が（文政七年・一八二四・六四歳で没）が晩年に永久保存のため貼りつけたものと思われる。

この一冊の集帖から、江戸中・後期には多くの文人・墨客が柳井を訪れている一端がわかっておもしろい。ここから中島棕隠が柳井津の洗心亭を訪れたのは七代目高田伝兵衛の時だったことが知られよう。そもそもの〈洗心亭〉なるものはどこにでもありそうな名前で、例えば、広瀬旭莊（一八〇七―一八六三）は、嘉永七年（一八五四）三月十四日から十五日まで京都の嵐山に出掛けて〈洗心亭〉なるところに宿泊し五絶を記しており、⁽¹⁰⁾『梅墩遺稿』巻之上（明治四十三年刊）はこれを「翌日坐洗心亭」と題している。このように京都にも〈洗心亭〉があったことは確かめられるが、しかし月性の郷里遠崎のすぐ西にある柳井津にも〈洗心亭〉があったことは中島棕隠自身の詩作がはっきりと示しており、月性の「洗心亭の席上にて賦して中嶋棕隠軒に贈る」詩がそこで催された詩会と関わるものであったことは間違いないであろう。更には⑦の詩題に言うように、棕隠は七月二日には長府の玉函楼に居たのであれば、柳井津の洗心亭を訪れたのはそれより後の秋に催されたことは、棕隠の⑬「柳井津高田氏の洗心亭」詩の末句〈秋蟾（秋の月）〉と詠まれているのにも合致する。

ここで改めて月性の「洗心亭の席上にて賦して中嶋棕隠軒に贈る」詩の内容を試みる。

1 筑紫河山遊履還 筑紫河山 遊履還る

あなたは九州は筑紫^{ちくし}辺りを遊覧して都へと戻られることとなった

2 豈圖此地暫留連 豈に図らん 此の地暫し留連するを

しかしまさかここにしばしとも滞在されることになるとは

3 鶯花三月 瓊江の酒

鶯や花を愛でる春三月は長崎で一献傾け

4 風雨一宵 壇浦船

風雨一宵 壇浦の船

風雨の夜は壇ノ浦で舟に乗っておられたとのこと

5 吟杖探來多勝概

吟杖探^{なず}ね来たれば勝概多し

杖を頼りに詩を吟じに尋ね来られたのですがどこもかしこも景勝の地

6 奚囊括去盡佳篇

奚^{けいのうくく}囊括^ゆり去^{こしらへ}けば尽く佳篇

詩を書き留めた袋の中はどれもこれも名作ばかり

7 不知今夕又何夕

知らず 今夕^ま又た何の夕なるかを

いつたいこの夕べがなんという夕べと申したらよいのやら

8 幸得追陪翰墨筵

幸いに翰墨の筵に追陪するを得たり

有り難いことに詩会に陪席させて頂くことになりました

首聯は棕隠が九州福岡あたり（筑紫）を経ての帰途、この柳井津に足を留めることになったことを述べ、頷聯は長崎（瓊江）や山口県下関市壇ノ浦（壇浦）といった道中の情景を想像し、頸聯は多くの景勝地を訪ね歩いてはすばらしい詩が生まれたと讃え、尾聯でこの夕べにその中島棕隠の詩会に侍ることが叶った望外の喜びを詠んでいる。この時に詠まれた棕隠の詩からは詩会の席上の作かは不明であるが、月性のこの〈翰墨筵〉によって洗心亭でも詩会が催されたことが知れる。福岡や壇浦は長崎から戻る道筋であるし、第三句の〈鶯花三月 瓊江の

酒」の「三月」とは、前掲の『金帯集』の①にも示すように、その頃はまだ長崎に居たことを逆に裏付けるものであり、決して月性が棕隠に詩を詠んで贈った時間ではない。

さらにこれを月性自身が記す足取りと重ねてみるに、第二節で掲げた①a『未定清狂吟稿』巻之三所収の「旧稿の後に題す並びに引（題舊稿後并引）」に次のように記している。

辛卯の夏（天保二年 一八三一）、予甫（はじ）めて十五歳にして、豊（豊前）に遊び恆眞卿先生（マ）の門（恒遠醒窓の蔵春園）に入りて詩を学ぶ。中間に二たび親を省み（遠崎への帰省）、一たび上京往来し、五年にして詩を作る。こと凡そ一千余首、自ら謂（おも）えらく足れりと。因りて又た謂えらく、詩を作るは事大いには難しからずして、是れ小技なるのみと。

乙未（天保六年 一八三五）の冬、豊（豊前）自り帰る。越えて明年丙申（天保七年 一八三六）の秋、年二十歳にして、再び肥（佐賀善定寺）に遊び、吾が佛蔡華師（ふきやう）（不及和尚）に学ぶこと亦た三年。然れども未だ曾て傍らに詩を作るを廃せざるなり。

己亥の夏（天保十年 一八三九）23歳、肥自り帰り、優遊として家に居り、今に于て一年。頃（この）暇余を以て旧稿を捜し、豊中に作る所を出だして之を読めば、則ち篇篇皆疵あり、句句尽く瑕あり。蓋し当時足れりと謂える者は、得て存すべからざるなり。……維れ時に天保十一年（一八四〇）24歳、歳は庚子に在り、冬十月下旬。

辛卯夏、予甫十五歳、遊豊入恆眞卿先生之門學詩。中間二省親、一上京往来、五年作詩凡一千餘首、自謂足矣。因又謂、作詩事不大難也、是小技而已矣。

乙未冬歸自豊、越明年丙申之秋、年二十歳、再遊肥、學吾佛蔡華師者亦三年。然而未曾廢傍作詩也。

己亥之夏、歸自肥、優遊家居、于今一年。頃以暇餘搜舊稿、出豐中所作而讀之、則篇篇皆疵、句句盡瑕。

蓋當時謂足矣者、不可得而存也。……維時天保十一年、歲在庚子冬十月下旬。

これに拠ると、月性は天保二年（辛卯一八三一）、十五歳で郷里遠崎の妙円寺を出て豊前は恒遠醒窓の蔵春園の門をくぐり、十九歳の天保六年（乙未一八三五）の冬、帰郷している。そして明るる年の天保七年（丙申一八三六）の秋、佐賀の善定寺で仏学を学び、天保十年（己亥一八三九）、二十三歳の時に遠崎に戻っている。それから一年を経た天保十一年（庚子一八四〇）に書かれたのが、この「旧稿の後に題す並びに引」である。結果として月性は豊前の蔵春園時代の五年で作った一千首あまりの漢詩を推敲して七十首にまとめたのであるが、この中でかつては自身でよくできたと思ったものが、いま改めて見直して見るととても残しておける代物ではないという反省に見られるように、漢詩人月性の完成にはなお長い道のりが必要であったことが率直に語られている。しかしここで注意すべきことは、十九歳の天保六年（乙未一八三五）の冬、帰郷し、翌年の天保七年（丙申一八三六）の秋、佐賀の善定寺で仏学を学んだと記されていることである。つまりこの間のことが月性が京都ではなく天保七年の秋に郷里遠崎のすぐ近くの柳井津で中島棕隠の詩会に陪席したということと矛盾がないかということ確かめる必要がある。

『清狂遺稿』に収録する「外湖中秋 不及老師の詩韻に次す（外湖中秋 次不及老師詩韻）」詩は、③a『清狂吟稿』巻之一にも収められているが、この詩の前には〈丙申〉の二字が明記されているので、天保七年（丙申一八三六）、月性二十歳の作と見なせる。この詩は両本で二ヶ所異同があるので、前者の詩句を掲げることにする。

外湖中秋 次不及老師詩韻 外湖中秋 不及老師の詩韻に次す

1 昨看豊山月 昨に看る豊山の月

2 今逢大嶋秋

今逢う大嶋の秋

3 他郷還故國

他郷還^また故國

4 草草一年周

草草にして一年周^{めぐる}

5 竹影動微風

竹影 微風に動き

6 桂香涼露浮

桂香 涼露浮かぶ

7 明年斯夜賞

明年 斯の夜の賞

8 不識亦何樓

識^しらず亦^また何れの樓なるかを

この詩について海原徹氏は『月性の研究』の中で「昨看豊山月、(略)不識亦何樓」とあることからみて、前年まで梨花寮にいたことは間違いない」と述べている。⁽¹⁾それは第一句の「昨に看る豊山の月」が梨花寮のある豊前の山に懸かる月を去年(天保六年)見たということを詠んでいることによる。するとこれと対を成す「今逢う大嶋の秋」というのは、天保七年のこの秋に目の前にしている光景ということになるが、それはつまり郷里遠崎のすぐ南東に望む周防大島(山口県大島郡周防大島町)を前にしたものといえよう。領聯も首聯を敷衍しており、「他郷」は豊前、「故國」は、当然、遠崎ということになる。詩題から得られる情報としては、これから学びに行く佐賀の善定寺の不及師が詠んだ詩に次韻したものである。時に不及がどこに居たかは判らぬが、この詩は寂寥感漂う八月(中秋)に郷里遠崎で自身の定めなき身の上に感慨を催して詠んだものである。要するに、前掲の「旧稿の後に題す並びに引」は、月性が十九歳の天保六年(乙未 一八三五)の冬、帰郷し、翌年の天保七年(丙申 一八三六)の秋、佐賀の善定寺で仏学を学んだと記していたが、この「外湖中秋 不及老師の詩韻に次す」詩に拠れば、八月もまだ郷里に居たことが知られるのである。そうすると中島棕隠が遠崎のすぐ近くの柳井津の高

田氏の洗心亭に立ち寄って、へ偶ま借る良宵の榻、秋蟾坐ろに情有り」と詠み、月性もそこで「洗心亭の席上にて賦して中嶋椶隠軒に贈る」詩を詠んだとみるその時間的問題は解決できるであろう。

もつとも月性が京都の洗心亭で中嶋椶隠に詩を献じたとする二つの年譜と前掲の「旧稿の後に題す並びに引」との間には齟齬があるように思われる。つまり「旧稿の後に題す並びに引」にはへ辛卯（天保二年一八三二）の夏、予甫めて十五歳にして、豊（豊前）に遊び恆眞卿先生の門に入りて詩を学ぶ。中間に二たび親を省み、一たび上京往来し、五年にして詩を作ること凡そ一千余首」と記すように、五年に及ぶ豊前の蔵春園時代に、二度帰省し、そして一度上京しているのであり、それ以降、この「旧稿の後に題す並びに引」が書かれた天保十一年（庚子一八四〇）までの間に上京したことは記されていない。このあたりの五年のことについて、煩を厭わず前掲の二つの年譜を再び掲げてみる。

『月性の研究』「贈正四位月性上人年譜」

一八三五 天保六（乙未） 一九

上京、途中にて詩を作る

冬醒窓塾より帰郷

一八三六 天保七（丙申） 二〇

京都で新年を迎う

三月、洗心亭席上で中嶋椶隠軒に詩を賦して贈る

三月二十六日、広島に遊び初めて坂井虎山に謁して詩を賦す

秋、広島を経て九州にゆき佐賀市与賀町善定寺不及の門に入る

『月性』『月性略年譜』

(天保) 六 一八三五 19

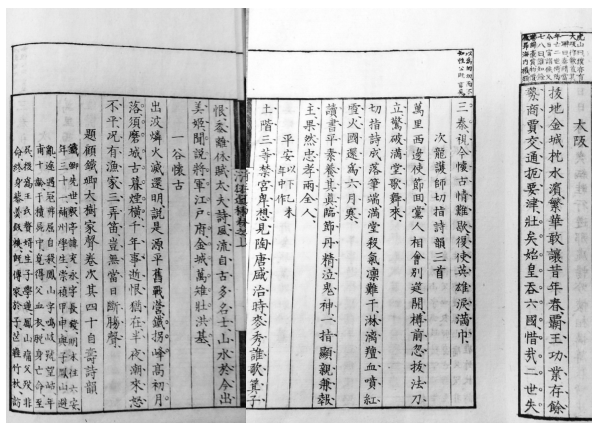
上洛、短期間で帰る。冬、蔵春園を去り帰郷。年末、上洛する。

(天保) 七 一八三六 20

新春を京都で迎える。3月中島棕隠に詩を示す。3・26広島の坂井虎山に束脩を呈する。秋、佐賀遊学のため発つ。11・24日田咸宜園に入り客席生となる。七日間学ぶ。12月初旬、薬師寺村の蔵春園を訪ね、しばらく在塾。12・22蔵春園に別れを告げて発つ。年末、佐賀善定寺の精居寮に入る。

この二つの年譜はこの頃に月性が二回上京したことを記している。月性は十九歳の天保六年(乙未 一八三五)の冬、蔵春園を去って帰郷しているので、「旧稿の後に題す並びに引」に記す蔵春園での五年の間のへ一たび上京往来」というのは、これらの年譜の記す前者の天保六年(乙未 一八三五)のことということになる。しかしこれについても些か修正が必要に思われる。この頃の詩を見ると、『清狂遺稿』、及び③a『清狂吟稿』とも(乙未)の作であることを記す「平安(平安)」と題する詩が掲載されており、この京都御所を詠んだ詩に拠って月性の京都滞在が認められようである。もつともこの詩だけを見ると、課題詩として月性がイメージに頼って詠んだという印象も拭えないわけではない。ただ『清狂遺稿』(図④)は、この詩の前に、その前年の天保五年(甲午 一八三四)の詩として、「大坂(大坂)」詩、及び「龍護老師の指を切る詩韻に次す(次龍護老師切指詩韻)」詩だけを載せるが、第二節掲出の③a『清狂吟稿』は次のように「大坂」詩と「龍護老師の指を切る詩韻に次す」詩の順番も違えば、更に二つの詩が載せられている。

「龍護老師の指を切る詩韻に次す」詩



図④ 『清狂遺稿』 卷上第二葉裏至第三葉裏

「晩に下津井（山口県山陽小野田市郡西下津）を発ち室津（山口県熊毛郡上関町）に至る舟中（晩發下津井至室津舟中）」詩

「大坂（大坂）」詩

「夜淀河を溯る二首（夜溯淀河二首）」詩

「平安（平安）」詩

そもそも「龍護老師の指を切る詩韻に次す」詩は、月性の叔父で大坂は長光寺の住職であつた龍護がこの天保五年（甲午 一八三四）の六月、本願寺の命により肥後に赴き、衆僧説得のために自らの薬指を切り落とした事件があつた。これを詠んだ龍護自身の詩に月性が次韻したものであるので、この詩は六月以降の作ということになるが、これは豊前の蔵春園で詠まれたものと見てよいであろう。それは次の「晩に下津井（山口県山陽小野田市郡西下津）を発ち室津（山口県熊毛郡上関町）に至る舟中」詩が豊前を離れてのものと見ることができからである。つまりここに掲げた③a『清狂吟稿』の詩の並びから見ると、この時、月性は明らかに関西を目指しているといえよう。つまり二つの年譜は月性が天保六年（乙未 一八三五 19 歳）に上京したと記すが、彼はその前年の天保五年（甲午 一八三四 18 歳）の内には豊前の蔵春園を発ち、山口の下津井や室津を経由し

て大坂に至り、そして「夜 淀河を溯る二首」其の二で「兩岸の蘆花（兩岸蘆花）」と詠んでいるように、秋には淀川を舟で京へと溯り翌年正月も京都に滞在するという長期なものであったのではなからうか。¹²⁾

さて問題の天保七年（丙申 一八三六）三月に京都で中島棕隠に詩を贈ったと見なす二つの年譜はその年にそれぞれ「京都で新年を迎う」「新春を京都で迎える」と記している。後者はそのまま前者を襲ったものと思われるが、その明確な根拠を筆者は見出せない。しかし或いはそれが『清狂遺稿』巻上に収める「丙申早春」詩に拠っているのではないかと思われるので、この詩について説明を加えておく。

丙申早春 丙申早春

1 寂寞幽居遠市闌 寂寞たる幽居 市闌に遠く

2 絶無塵累到柴關 絶えて塵累の柴関に到る無し

3 春聲先入鴨邊水 春声 先に入る 鴨辺の水

4 雪色猶横雁外山 雪色 猶お横たう 雁外の山

5 二十年移孤夢裏 二十年移る 孤夢の裏

6 一千詩得壯遊間 一千詩得たり 壯遊の間

7 寒村却喜人來少 寒村 却て喜ぶ 人の來たること少き

8 舊草援毫隨意刪 旧草 毫を援きて随意に刪る

この詩は月性が旧稿を改めながら、二十年のそれまでの来し方をひとり静かに振り返る閑適の詩である。頸聯で「二十年移る 孤夢の裏、一千詩得たり 壯遊の間」と詠むのは、「旧稿の後に題す並びに引」の中で豊前の蔵春園時代の五年で「一千余首」の漢詩を作ったと述べていることにも吻合し、天保七年（丙申 一八三六）の二

十歳を迎えた早春の詩であることは間違いない。しかしここで問題となるのはこの詩がいつたどこで作られたものかということである。つまり二つの年譜に拠れば、この詩は京都での作ということではなければならないが、この詩の内容からむしろこれが郷里遠崎で詠まれたものであると見るのがいたって自然である。何よりもこれを詠んでいる所が、〈寒村〉の〈柴関〉であるということが京都の地にまったく相応しくないというのが決定的である。頷聯の〈春声 先に入る 鴨辺の水、雪色 猶お横たう 雁外の山〉という句作りは、南宋、范成大の「將に石湖に至らんとし道中に事を書す（將至石湖道中書事）」詩に「水、緑にして鷗、邊、漲り、天青くして雁、外、晴る（水、綠鷗邊漲、天青雁外晴）」に拠ったものであるが、月性はよほどこれが入ったらしく、天保十一年（庚子一八四〇）の元日に詠んだ「庚子元日 某生の韻に和す（庚子元日 和某生韻）」詩の頷聯にも〈雁、外、の青山、猶お雪、色、なるも、鴨、辺、の流水、已に春、声、（雁外青山猶雪色、鴨邊流水已春聲）と流用しているが、この詩もまた郷里遠崎での作である。因みにこの「庚子元日 某生の韻に和す」詩は、① a 『未定清狂吟稿』卷之三では「早、春、に作有り（早春有作）」に作っているので、この「丙申早春」詩も元日の作と見ることも可能であろう。そもそも「旧稿の後に題す並びに引」には〈乙未（天保六年一八三五）の冬、豊自り帰る〉と述べているのであれば、『月性』「月性略年譜」が〈年末、上洛する〉するというのはかなり唐突の感があり、それは翌年〈新春を京都で迎える〉ということの説明するために思われるが、要するに月性は天保七年（丙申一八三六）は秋まではずっと郷里遠崎に居たのである。そもそも上京というのはかなり大きな出来事である。もし天保七年の上京があったとすれば、天保十一年に書かれた「旧稿の後に題す並びに引」にも言及されるべきであろう。

五、まとめ

月性の漢詩を彼の足跡に沿って理解するのに、その収録数の多さ、そして概ね制作年代順に並べられている『清狂遺稿』はいたつて簡便な書といえることができる。しかし必ずしも無条件にこの書に寄り掛かることができないのは、本稿で「洗心亭の席上にて賦して中嶋棕隠軒に贈る」詩に見た通りである。第三節でも述べたように『清狂遺稿』が月性没後三十四年経ってから出版されたものであることを思えば、編者である大洲鐵然や天地哲雄がさまざまな写本などを参考にしながら、月性の漢詩をその制作時代順に並べようと意図しつつ編纂せねばならなかったことかなりの困難が伴っていたことは想像に余りあるものがある。もし第二節で掲出した写本の中にこの詩も収録されていたなら、その並びからこのような配列の間違いと、そして後世の研究者の誤解を招かずに済んだかもしれない。

わたしたちはこのような『清狂遺稿』の不備を補うために、『清狂遺稿』以外のできるだけ多くの写本と引き比べながら慎重にその制作年代や創作情況を検討しなければならない。そしてその制作年代なり創作情況がより正確になれば、月性漢詩が次第に完成されていくその過程と彼自身の成長の跡を正確に把握することができるよう。因みに前掲の二つの年譜にも掲出しておいたが、月性が初めて広島の藩儒、坂井虎山（二七九八―一八五〇）に拝謁したのが天保七年（一八三六）というのも再考の余地があるように思われる。

月性という、得てして、直ちに功成り名を遂げた人物を思い浮かべがちである。よって例えば、年譜にへ中島棕隠軒に詩を賦して贈る、或いはへ中島棕隠に詩を示すと記されていて、あの月性ならばさもありなんと納得してしまうところがあるのではなからうか。月性が柳井津は高田氏の洗心亭で中島棕隠の詩会に侍って棕

隠に詩を贈ったといつても、すでに五十六歳の齡を数え京都漢詩壇の大御所と目されていた中島棕隠と月性との間にある距離を知るべきであろう。わずか五年ほど蔵春園で詩を学んだだけの二十歳の月性が詩会で棕隠に詩を贈ったというのは、その機会に頑張つて詩を作つてみたのであるが、棕隠にしてみれば末席に侍る若き月性など眼中にはなかったというのが実情ではなかっただろうか。

月性は生まれながらにして偉人であつたわけではない。彼も若い時にはすぐれた師匠の指導の下、多くの学友たちに交じつて切磋琢磨し、そして次第に頭角を現していったのである。漢詩人としての月性についても同様のことが言え、彼は十五歳で郷里遠崎を離れ九州は豊前の蔵春園で恒遠醒窓に詩作を学んだ。その蔵春園の資料は現在、福岡県求菩提資料館（福岡県豊前市鳥井畑二四七）に所蔵されており、例えば、蔵春園の学友たちが編んだ漢詩集『同韻集』に月性（竺烟溪）作の「咏史五首」が残されている。しかし彼はそれを氣に入らなかつたのか、すべて大きく抹消の墨が施されているものの、其の一は字句を大きく改めながらも、『清狂遺稿』には「項羽」と題されて収められている。『清狂遺稿』巻上の四番目に載せる「落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六を録す」も、ちやうど蔵春園で学んでいた頃の作で、しかも学友の恒遠政吉や釈又新にも同題の詩が『同韻集』にあり、彼らはこれを課題詩として競い合つて作つていたことが知れる。前掲の「旧稿の後に題す並びに引」にも「蓋し当時足れりと謂える者は、得て存すべからざるなり」と告白するように、月性の漢詩は完成の途上にあつたのである。このような月性の漢詩を彼の足跡と併せて辿っていくことを可能にしているのは写本をはじめ月性に関する資料が今日なお多く伝わっているからであり、わたしたちはそれら資料を駆使してこそ当時の月性の実像に迫ることができるといえよう。

註

- (1) 岡不可止「男兒立志出鄉関の作者攷」(昭和十三年三月二十五日 岩波『國語特報』第十九號) 第二六頁。
 (2) 図①は柳井市立大畠図書館(山口県柳井市大畠一五〇番地)の月性文庫所蔵のもの。
 以下はこれより以前に刊行されたものであるが、収録数が少ない。

・吉田松陰評『清狂詩鈔』全一冊(明治二年 松下邨塾蔵版)。これは安政二年(一八五五)作の全二十九首を収録。

・吉田松陰先生妙円寺月性著『慨士遺音』前編三冊。卷上・卷下・附録の三冊構成で卷上見返りに〈京師 都文堂文林堂全梓〉とあり、附録刊記には〈明治二歳己巳十月官許 皇京書舖 寺町通佛光寺上ル菱屋重助 佛光寺高倉西エ入 本屋小兵衛〉と記す。天保十二年(一八四二)頃から安政二年(一八五五)頃までの全九首を卷下に収録。

(3) 月性展示館には大正六年(一九一七)の『清狂遺稿』第二版が所蔵されている。初版との違いは第二冊の最後に当時の妙円寺の住職立泉浣融による排印の跋文一葉が賦され、左記の刊記も木版ではなく排印。

明治廿五年一月十日出版

大正六年六月拾九日第二版印刷發行

編輯者 贈正五位 大洲鐵然

編輯者 天地哲雄

山口縣玖珂郡遠崎 妙圓寺住職

立泉浣融

印刷製本 京都市西六條御前通油小路西入

發賣所

山内文華堂

大阪口座二〇三一〇番

因みに古裂會の平成十四年三月十六日のオークションカタログ(第五頁)に久坂玄瑞(二八四〇―一八六四)の『清狂遺稿跋』一幅が掲載されている。これは『吉田松陰全集』第四卷(昭和九年十二月山口県教育委員会岩波書店)にも個人蔵としてその写真が載せられており、それには吉田松陰(二八三〇―一八五九)及び口羽徳祐(二八三四―一八五九)の添削も添えられていると記され、併せて第六卷(昭和十年九月)収録の安政五年(一八五八)六月一日の「四三八久坂玄瑞に與ふ」(第四十一頁)に記す吉田松陰の久坂玄瑞への跋文執筆依頼に関連することも指摘している。するとこれは口羽徳祐が亡くなる安政六年(一八五九)八月までに書かれた草稿ということになるが、大洲鐵然編『清狂遺稿』には、山県有朋(一八三八―一九二二)の「序」(明治二十四年一八九一)、品川弥二郎(一八四三―一九〇〇)の「月性遺稿序」(明治二十三年一八九〇)、長三洲(一八三三―一八九五)の「序」(明治二十三年)を載せるのみである。

(4) 三坂圭治監修『維新の研究―月性の研究』(一九七九

年五月 月性顕彰会 マツノ書店

(5) 海原徹『月性』(二〇〇五年九月 ミネルヴァ書房)。

(6) 前掲注(4)「贈正四位月性上人年譜」第七頁。

(7) 前掲注(5)「月性略年譜」第三二八頁。

(8) 前掲注(5)第三〇頁にも「天保六(一八三五)年冬、恒遠塾を去り、故郷に帰った月性は、京都で新年を迎えており、席の暖まる暇もなく上洛したことが分かる。三月某日、洗心亭席上で中島棕隠に詩を賦して贈ったというから、しばらく滞在していたようである」と記す。

(9) 入谷仙介『中島棕隠』(二〇〇二年三月 研文出版)。

(10) 『広瀬旭莊全集 日記編五』所収『日間瑣事備忘録』巻九十七(昭和五十八年十二月 広瀬旭莊全集編集委員会 思文閣出版) 第二九〇頁。

(11) 前掲注(4)海原徹「教育者としての月性」第一〇四頁。海原氏は前掲注(5)「第二章 諸国修行の旅」第三三頁では「外湖中秋次不及老師詩韻」と題する詩に、「昨は看る豊山の月、今は逢ふ大嶋の秋。他郷還た故国、草々として一年周る。竹影微風に動き、桂香涼露浮ぶ。明年斯夜の賞、識らず亦何れの楼ぞ」(『清狂遺稿』巻上)とあるのは、入門した頃のことらしいが……と記す。

(12) 前掲注(4)「贈正四位月性上人年譜」に天保六年のこととして「上京、途中にて詩を作る」と記すのは、或いは「夜溯淀河二首」を指しているのかもしれないが時

間的には合わない。

資料閲覧に際しては、月性展示館、松陰神社宝物殿至誠館、福岡県求菩提資料館、耶馬溪風物館には格別の配慮を賜った。また僧月性顕彰会の西原光治氏、森本政彦氏、西本勝則氏、守田訓氏、河原敏恵氏、並びに求菩提資料館元館長恒遠俊輔氏にも多大な御協力御教示を賜った。ここに末筆ながら謝意を表する。